

第二章 懺悔滅罪

○(第七節) 仏祖憐みの余り広大の慈門を開き置けり、是

れ一切衆生を証入せしめんが為なり、人天誰

か入らざらん、彼の三時の悪業報必ず感ずべ

しと雖も、懺悔するが如きは重きを転じて軽

受せしむ、又滅罪清浄ならしむるなり。○(第八節) 然

あれば誠心を専らにして前仏に懺悔すべし、

恁麼するとき前佛懺悔の功德力を拯いて清

浄ならしむ、此功德能く無礙の浄信精進を生

長せしむるなり。浄信一現するとき、自佗同

く転ぜらるるなり、其利益普ねく情非情に蒙

ぶらしむ。其大旨は、願わくは我れ設い過去の

悪業多く重なりて障道の因縁ありとも、仏道

に因りて得道せりし諸仏諸祖我れを愍みて業

累を解脱せしめ、学道障り無からしめ、其功德

法門普ねく無尽法界に充滿弥綸せらん哀みを

我に分布すべし、仏祖の往昔は吾等なり、吾

等が当来は仏祖ならん。○(第十節) 我昔所造諸悪業、

皆由無始貪瞋痴、従身口意之所生、○一切我今

皆懺悔、是の如く懺悔すれば必ず仏祖の冥助

あるなり、心念身儀発露白仏すべし、○(第十一節) 発露の

力罪根をして○(第十二節) 銷殞せしむるなり。